

26. 当センターにおける肺動脈塞栓症の治療成績

湯浅奈都江, 石橋 巖, 宮崎義也
酒井芳昭, 松野公紀, 中山 崇
鈴木建則, 大塚健太郎, 角田興一
(県救急医療センター)

肺動脈塞栓症は死亡率, 再発率とも高く, また近年その症例数は当センターにおいて増加してきており, 治療戦略は重要な問題となっている。97年から2001年までに当センターでは24例の肺動脈塞栓症を経験し, うち17例に下大静脈フィルター留置を施行した。これらに関し院内予後, 再発率などを検討したので報告する。

27. 治療抵抗性の悪性リンパ腫の経過中に急性間質性肺炎が出現し, ステロイドパルス療法が奏功した症例

吉原 慶 (鹿島労災)

症例は75歳女性。1991年に NHL (diffuse small B-cell type) CSIIIA の診断となり, 種々の化学療法を行ったが治療に抵抗性で白血化に到った。2001年3月には急速に全肺野に間質影が拡がり, 検査の結果や経過から感染症や薬剤の影響は否定的であった。原病関連の急性間質性肺炎と診断し, ステロイドパルス療法を施行したところ急速に改善した。本症例は現在でも非寛解のまま生存中である。

28. 両側性副腎腫瘍による Cushing 症候群の1例

茂田あずさ, 古田俊介, 田村 憲
若林良則, 橋本淑子, 林 良明
(沼津市立)
内田大学 (千大)
飯原雅季, 小原孝男 (東京女子医)

症例は36歳女性。4年前から発汗過多, 全身倦怠感, 不正生理出血を自覚。今回腰背部痛のため行った MRI 検査上, 両側副腎腫瘍を認め当院に紹介された。CT, MRI にて両側副腎に20mm大の mass を認めた。ACTH 5.0, Cortisol 16.8。Cortisol はパソプレッシン負荷にて上昇せず。腹腔鏡下に両側副腎腫瘍を摘出し, ステロイド補充を行っている。

29. Preclinical Cushing 症候群を呈した両側副腎腫瘍の1例

川勝千桂子, 齋藤 淳, 高野達郎
祖山暁子, 飯塚 孝, 伊藤浩子
西川哲男 (横浜労災)

57歳, 男性。2001年9月, 急性胆嚢炎で入院中に腹

部 CT 上左右副腎腫瘍を認めた。ホルモン基礎値正常なるも 1 mg, 8 mg デキサメサゾンで F の抑制不充分あり, アドステロールシンチ摂取率に左右差なく, 副腎静脈採血で左の ACTH 無反応な F 高値, 右の F 過大反応を認めた。胆嚢・左右副腎摘出術を施行し左副腎は径 3 cm の腫瘍, 右は過形成様病変を認めた。左右いずれが PCS の責任病巣であるか興味深い1例であった。

30. 副腎重複病変の診断法と治療法についての検討

大村昌夫 (横浜市立大)
西川哲男 (横浜労災)

【目的】171例の副腎疾患患者で同一症例に複数の副腎疾患が合併する症例を詳細に検討した。【結果】アルドステロン産生腺腫, 特発性アルドステロン症, クッシング症候群, プレクリニカルクッシング症候群, 褐色細胞腫, 非機能性副腎腫瘍が種々の組み合わせで合併する症例が16例 (9.4%) あった。【考案】副腎疾患の診療では常に他の副腎疾患の合併を考え診断, 治療を行うべきと考えられた。

31. 心血管合併症に及ぼすアルドステロンの影響

石川 耕, 前澤善朗, 祖山暁子
齋藤 淳, 伊藤浩子, 西川哲男
(横浜労災)

(1) 今回の検討では40例中31例78%に何らかの心血管合併症を認め, 原発性アルドステロン症でも高率に心血管合併症を認める。(2) 心血管合併症を有する群では有意に血圧も高かった。(3) 合併症が重症化するに従い血中アルドステロン濃度の基礎値が高く, ACTH あるいはフロセミド, カプトリルの負荷の結果により, 合併症の高いものにアルドステロンの反応性分泌が高い傾向にあることが示唆された。

32. 当院における電子診療録システムの運用状況と問題点

王 伯銘, 鈴木啓司, 唐木章夫
花岡和明 (井上記念)

政府の助成を受け平成13年11月よりソフトウェア・サービス(株)製の e-カルテ (オーダー・エントリーシステム) を採用し, 運用を開始した。当初パソコン操作不慣れのため外来患者の待ち時間及び職員帰宅時間が大幅に延長したが, 2ヶ月経過した現在ではほぼ通常診療ペースに戻っている。このシステムで医療情報開示による患者信頼感の獲得, 情報同時共有によるチーム医療の強化と事故防止, 業務の合理化を実感できた。